



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	留学生の日本国内における観光動向分析：北海道大学を事例として
Author(s)	師，耀軒； 棧敷，孝浩； 澤内，大輔 他
Citation	北海道大学農経論叢， 64， 97-104
Issue Date	2009-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39859
Type	departmental bulletin paper
File Information	RAE64_011.pdf



留学生の日本国内における観光動向分析

－北海道大学を事例として－

師 耀軒・棧敷 孝浩・澤内 大輔・中谷 朋昭・山本 康貴

An Analysis of Domestic Travel Behaviors of International Students in Japan: The Case of Hokkaido University

Yaoxuan SHI, Takahiro SAJIKI, Daisuke SAWAUCHI, Tomoaki NAKATANI and
Yasutaka YAMAMOTO

Summary

The aim of this paper is to analyze, through a mail survey, domestic travel behaviors of international students in Japan by taking the case of Hokkaido University as an example. Our results were compared with those of existing surveys on foreign visitors to Japan and Hokkaido. Our data would serve as a fundamental database of domestic travel behaviors of the international students in Japan.

1. 課 題

日本政府は、2002年に、外国人旅行者の訪日を促進する「グローバル観光戦略」を策定し、「2010年に訪日客1,000万人を」との目標を掲げたキャンペーンの実施を表明した。2003年1月には、当時の首相による施政方針演説の中で「わが国の文化・観光の魅力を全世界に紹介し、訪日外国人旅行者の増加とこれを通じた地域の活性化を図る」旨の“観光立国への道”が表明された。

観光を主目的として訪日する外国人の増加を促進していく意義は、経済や地域の活性化だけではなく、国際相互理解の促進などの面からも極めて大きい（北海道庁〔5〕）。このため、いくつかの機関（JNTO〔8〕、北海道庁〔4〕）は、外国人観光客による日本国内での観光動向についての基礎データを得るために、外国人観光客（註1）に対するアンケート調査を実施している。このような基礎データは、政府による観光政策の立案や旅行会社によるマーケティング戦略の構築などに有益な情報を提供している。

本論文の課題は、北海道大学（以下、北大と略）在学中の留学生を対象者としたアンケート調査分析を通じ、留学生の日本国内における観光動向を

明らかにすることである。留学生の日本国内における観光動向に着目する意義は、次に述べる二点であるが、いずれも極めて大きいと考える。

一つめの意義は、留学生を「居住外国人」の一集団として着目する視点である。日本に在留中あるいは帰国後の情報発信力を考えたときに、その存在は極めて重要である。具体的には、第一に、日本に居住し、日本を良く知る外国人である留学生から得られた情報を分析することで、日本人の視点や一般の外国人観光客では気づきにくい観光サービスの改善点などを見つけやすいと思われる。第二に、留学帰国後における日本観光の「宣伝役」としての役割も注目すべき点である。

二つめの意義は、留学生を「国内観光市場における顧客層」の一集団として着目する視点である。国際的には、留学生を「国内観光市場における顧客層」の一集団として分析した研究は、多数存在している（Hsu and Sung〔6〕、Kim and Jogaratnam〔7〕、Ryan〔10〕など）。日本の大学・大学院への外国人留学生の受け入れ拡大については、2025年をめどに100万人を目指すとの政府方針も検討されている。しかし、日本において、留学生を「国内観光市場における顧客層」の一集団とし

て着目して分析は、極めて少ないのが現状である（註2）。

本論文の構成は次の通りである。2. では、本論文で使用するデータの収集と分析方法を述べる。3. では分析結果を示し、最後に4. では結論と今後の課題を述べることにしたい。

2. 分析方法とデータ

本研究では、北大在籍の留学生889人（註3）を対象としたアンケート調査を実施して、留学生の日本国内における観光動向を解明する。分析対象者が北大留学生のため、北海道内（以下、道内と略）の観光に焦点を当てた調査内容とした。具体的な調査内容は、①留学生の訪問先と観光目的、②留学生の道内観光行動、③留学生の道内観光に対する満足度と今後の意向などである。

アンケート票作成においては、既存研究（Chadee and Cutler [1], Collier [2], Field [3], Hsu and Sung [6], Kim and Jogaratnam [7]）、北海道庁が実施した『平成18年度訪日外国人来道者動態・満足度調査 調査報告書』（北海道庁 [4]）などを参考にした。アンケートの実施期間は、2007年12月17日～26日である（註4）。回収数は276通（回収率：31.0%）であり、回答不備などを除いて分析に用いた有効回答数は177通（有効回答率：19.9%）である。

本研究では、北大留学生の分析結果と既存調査における一般の訪日外国人観光客の分析結果を比較して、留学生における観光動向の特徴を見ていくことにしたい。比較対象の外国人観光客については、二つの調査結果（JNTO [8]、北海道庁 [4]）を利用する。

3. 分析結果

1) 留学生の属性

表1は、本研究のアンケート調査から得られた回答者属性を北大全体のものと比較した結果である（註5）。本研究における留学生の個人属性は、北大全体における留学生の個人属性と類似している点が確認できる。男性比率は、本研究が61.6%、北大全体が59.5%であり、アジア諸国の出身者は、本研究が83.6%、北大全体が80.3%である。

収入と日本語会話レベルについて北大全体のデ

ータは利用できなかったが、本アンケート結果から、月収15万円未満である留学生の割合が全体の55.9%である点、日本語の会話レベル（註6）がB（基本的な意味を伝えることができるが、いくつか間違いがある）である留学生の割合が全体の29.4%で最も多い点が明らかとなった。

表1 回答者の属性

	人数・パーセンテージ			
	本 研 究		北海道大学	
性 別				
男	109	61.6%	529 ¹⁾	59.5%
女	68	38.4%	360	40.5%
出身地域				
アジア	148	83.6%	653	80.3%
中東	6	3.4%	13	1.6%
オセアニア	2	1.1%	5	0.6%
欧州	5	2.8%	44	5.4%
NIS	3	1.7%	19	2.3%
中南米	8	4.5%	29	3.6%
アフリカ	5	2.8%	34	4.2%
北米	0	0.0%	16	2.0%
在籍コース				
博士課程	79	44.6%	319	39.2%
修士課程	46	26.0%	216	26.6%
学部生	16	9.0%	108	13.3%
その他	36	20.3%	170	20.9%
収 入				
10万円未満	50	28.2%		
10～15万円	49	27.7%		
15～20万円	68	38.4%		
20～30万円	6	3.4%		
30万円以上	4	2.3%		
日本語の会話レベル ²⁾				
A+	12	6.8%		
A	33	18.6%		
B	52	29.4%		
C	33	18.6%		
D	26	14.7%		
E	21	11.9%		
合 計	177	100.0%	813	100.0%

注1) 男女人数と比率の計算は「平成19年度北海道大学部局別外国人留学生数」に基づいて作成した。

注2) 日本語の会話レベルA+は「母国語とほぼ同じレベルで会話できる」、Aは「母国語より若干劣る程度で会話できる」、Bは「基本的な意味を伝えることができるが、いくつか間違いがある」、Cは「基本的な意味を伝えることができるが、たくさん間違いがある」、Dは「単語を並べる程度の会話ができる」、Eは「日本語での会話ができない」。

2) 留学生の訪問先と観光目的

以下では、北大に在籍している留学生の過去1年間における北海道外（日本国内のみで、日本国外は除く）訪問先、北海道内訪問先、観光目的の結果を述べる。

図1は、留学生と外国人観光客が、過去1年間に、訪問したことのある北海道外の観光地を示す。留学生の約5割（49.7%）は、「北海道外への観光経験なし」と回答している。この回答を除いた留学生の「北海道外での訪問先」上位3位は、関東（31.6%）、関西（24.3%）、東北（8.5%）である。外国人観光客の「北海道外での訪問先」上位3位は、関東（66.3%）、関西（32.4%）、中部（21.8%）であり、1位と2位の訪問地は留学生と同じである。

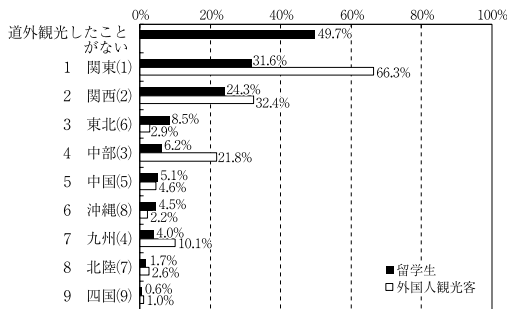


図1 留学生と外国人観光客の日本国内で訪問したことのある道外の観光地

出所) 外国人観光客のデータはJNTO [8] による2005年のデータ。

注) カッコ内の数字は外国人観光客の順位。

図2は、留学生と外国人観光客が、北海道内で訪問したことがある観光地を示す。留学生の約1割（11.3%）は「北海道内の観光経験なし」と回答している。この回答を除いた留学生の「北海道内での訪問先」上位5位は、小樽（63.8%）、札幌（46.3%）、富良野（42.9%）、洞爺（34.5%）、旭川（29.4%）であり、何れも北大が立地する札幌市から日帰り旅行が可能な観光地となっている。外国人観光客の「北海道内での訪問先」上位5位は、札幌（73.8%）、小樽（68.8%）、洞爺（47.5%）、登別（43.7%）、函館（41.0%）である。また「北海道内での訪問先」上位10位において、8つの訪問先（小樽、札幌、富良野、洞爺、旭川、函館、登別、美瑛）が留学生と外国人観光客と同じである。

り、北海道内の訪問先について、留学生と外国人観光客は似ている傾向が見られる。

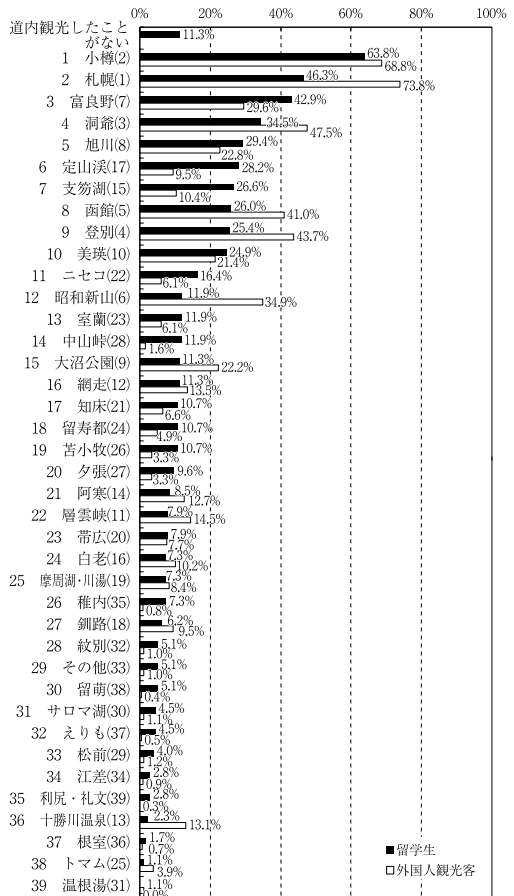


図2 留学生と外国人観光客の道内で訪問したことのある観光地

出所) 外国人観光客のデータは北海道庁 [4] による2006年度のデータ。

注) カッコ内の数字は外国人観光客の順位。

図3は、留学生と外国人観光客の北海道内観光における目的を示している。留学生の「北海道内観光の目的」上位5位は、自然観賞（68.9%）、温泉・保養（38.4%）、花の名所めぐり（33.9%）、都市見物（28.8%）、名物の飲食（27.1%）である（註7）。農・漁業体験は8.5%とアンケートで設定した観光目的の20項目中、16位と低い順位になっている。外国人観光客の「北海道内観光の目的」上位5位は、自然観賞（74.7%）、温泉・保養（60.7%）、都市見物（41.4%）、名物の飲食（40.1%）、買い物（36.4%）である。「北海道内観光の目的」上

位5位において、四つの目的（自然観賞，温泉・保養，都市見物，名物の飲食）が留学生と外国人観光客と同じであり，北海道内観光の目的について，留学生と外国人観光客は似ている傾向が見られる．外国人観光客の場合，農・漁業体験は全項目中，最下位（2.5%）であり，留学生，外国人観光客ともに，北海道内の観光目的として「農・漁業体験」の順位は低い．

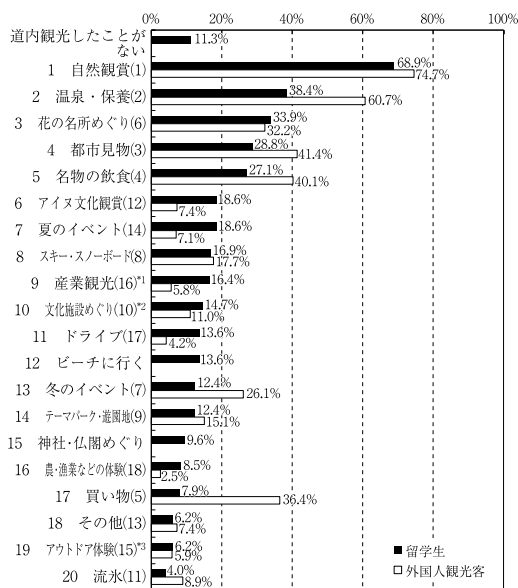


図3 留学生と外国人観光客の道内観光での目的
出所) 外国人観光客のデータは北海道庁〔4〕による2006年度のデータ。

注1) 産業遺産や工場見学などの産業観光。

注2) 美術館などの文化施設めぐり。

注3) 乗馬・ラフティングなどのアウトドア体験。

注4) カッコ内の数字は外国人観光客の順位。

3) 留学生の観光行動

以下では，北大留学生における北海道内の観光行動の特徴を明らかにするため，道内観光の平均費用，道内観光の交通手段，道内観光の宿泊施設と宿泊数，道内観光の観光情報の入手先についての結果を述べる。

図4は留学生の道内観光の平均費用（旅行1回当たり）を，図5は外国人観光客の道内観光の平均費用（1人あたり）を示している．留学生の場合，旅行1回あたりの総旅行費用（宿泊費，交通費などすべて含む）は，1～3万円との回答割合が最も高く（42.4%），次いで1万円未満（29.4%），

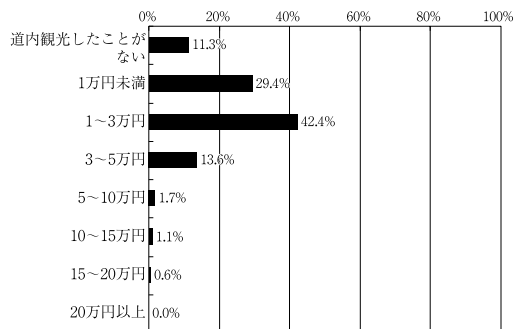


図4 留学生の道内観光の平均費用（旅行1回あたり）

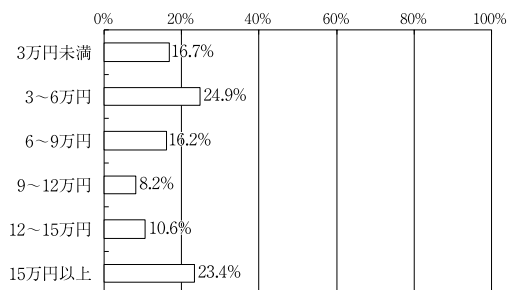


図5 外国人観光客の道内観光の平均費用（1人あたり）

出所) 外国人観光客のデータは北海道庁〔4〕による2006年度のデータ。

注) 外国人観光客の道内観光の平均費用はパッケージツアー料金・日本に来る交通費などを除いた費用である。

3～5万円（13.6%）となっている．外国人観光客の場合，一人あたりの旅行費用（パッケージ料金などを除く）は3～6万円（24.9%）との回答割合が最も高く，次いで15万円以上（23.4%），3万円未満（16.7%）となっている。

表2は留学生と外国人観光客における北海道内の観光行動（交通手段，宿泊施設と宿泊数，観光情報の入手先）を示している。

留学生と外国人観光客の道内観光における交通手段について，留学生の場合，交通手段の利用における上位3位は，鉄道（59.3%），路線バス（37.3%），レンタカー（25.4%）であり，公共交通（鉄道，路線バス）の利用が多い傾向がみられる（註8）．外国人観光客における上位3位は，貸切バス（63.9%），鉄道（18.0%），路線バス（9.5%）である．外国人観光客の方が留学生よりも貸切バスの利用率が高いのは，外国人観光客では団体・

バック旅行の利用率が高いためと推察される（北海道庁〔4〕）。

留学生と外国人観光客の道内観光における宿泊施設について、留学生の場合、宿泊なし、つまり、日帰り旅行との回答割合が最も高い（45.2%）。利用率上位3位の宿泊施設は、観光旅館（28.8%）、都市型ホテル（20.3%）、キャンプ（16.9%）である。外国人観光客の場合、利用率上位3位の宿泊施設は、観光旅館（57.9%）、都市型ホテル（35.7%）、民宿・ペンション（4.2%）である。外国人観光客の場合、観光旅館、都市型ホテルに集中しているのは、外国人観光客では団体・バック旅行の利用者が多い点に起因するものと推察される。留学生と外国人観光客の道内観光の平均日数について、留学生の上位3位は1泊（33.9%）、日帰り（33.3%）、2泊（16.9%）である。外国人観光客の上位3位は、4泊（52.9%）、3泊（22.2%）、6泊（6.0%）である。以上の結果を踏まえて、留学生は外国人観光客よりも、宿泊数が少ない傾向にある点、また民宿などの安価な宿泊施設の利用が多い傾向にある点が示された。

留学生と外国人観光客の道内観光情報の入手先について、上位3位の情報源は、留学生がインターネット（63.3%）、口コミ（39.0%）、テレビ（29.9%）であり、外国人観光客がインターネット（40.0%）、旅行会社（38.9%）、テレビ（32.1%）である。このように、留学生は、外国人観光客よりも、観光の情報源として、口コミを利用する割合が高く、旅行会社を利用する割合が低い点が示された。

以上の分析結果（留学生は、外国人観光客よりも、公共交通の利用が多く、宿泊数が少なく、安価な宿泊施設の利用が多く、旅行会社を利用する割合が低い点）から、留学生の観光行動における特徴は、「観光費用をできるだけ節約し、安価なものにしようとする」点であることが示唆される。このような留学生における観光行動の特徴は、留学生の収入が相対的に低い（表1）点にも起因するものと推察される。

4）留学生の道内観光に対する満足度と今後の意向

以下では、北大留学生の北海道内観光に対する満足度と今後の意向を示す。

表2 留学生と外国人観光客における北海道内の観光行動

道内観光行動の項目	留 学 生 の 割 合	外国人観光客の割合
交通手段		
鉄道(2) ¹⁾	59.3%	18.0%
路線バス(3)	37.3%	9.5%
レンタカー(5)	25.4%	2.0%
貸切バス(1)	19.8%	63.9%
自家用車	14.7%	— ²⁾
その他(5)	11.3%	2.3%
航空機(4)	2.3%	2.4%
道内観光したことがない	11.3%	—
宿泊施設		
日帰り	45.2%	—
観光旅館(1)	28.8%	57.9%
都市型ホテル(2)	20.3%	35.7%
キャンプ	16.9%	—
親戚・知人宅(5)	15.3%	0.3%
民宿・ペンション(3)	14.7%	4.2%
ユースホステル	10.7%	—
その他(4)	3.4%	3.3%
道内観光したことがない	11.3%	—
平均日数（比率）		
日帰り	33.3%	—
1泊2日(8)	33.9%	1.5%
2泊3日(4)	16.9%	5.7%
3泊4日(2)	2.3%	22.2%
4泊5日(1)	1.1%	52.9%
5泊6日(6)	0.0%	2.9%
6泊7日(3)	0.6%	6.0%
8～10日(5)	0.0%	5.0%
11～14日(7)	0.0%	2.5%
15日以上(9)	0.6%	1.2%
道内観光したことがない	11.3%	—
観光情報の入手先		
インターネット(1)	63.3%	40.0%
口コミ(6)	39.0%	15.0%
テレビ(3)	29.9%	32.1%
雑誌(4)	29.4%	31.3%
旅行会社(2)	22.6%	38.9%
その他(7)	19.2%	6.8%
新聞(5)	7.3%	19.8%
ラジオ(8)	1.1%	4.0%

出所）外国人観光客のデータは北海道庁〔4〕による2006年度のデータ。

注1）カッコ内の数字は外国人観光客の順位。

注2）—は調査項目に含まれてないことを示す。

図6は、留学生および外国人観光客の道内観光全体に対する満足度を比較したものである。道内観光全体の満足度（満足と答えた割合）は、留学生が21.0%、外国人観光客が53.4%であり、留学生

の方が外国人観光客よりも、道内観光全体に対する満足度が大幅に低いという傾向が見られる。

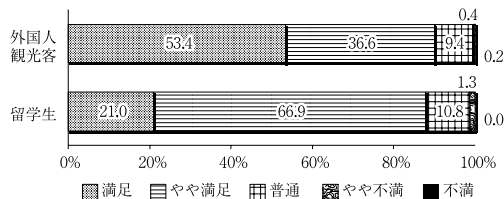


図6 道内観光全体の満足度

出所) 外国人観光客のデータは北海道庁〔4〕による2006年度のデータ。

図7は、今後、道内で訪問したい観光地を示す。今後、訪問したい北海道内観光地について、留学生の上位5位は、函館(55.4%)、知床(42.4%)、富良野(31.1%)、旭川(27.1%)とニセコ(27.1%)であり、回答率が20%を上回る観光地は、15箇所である。訪問したことがある観光地(図2)の結

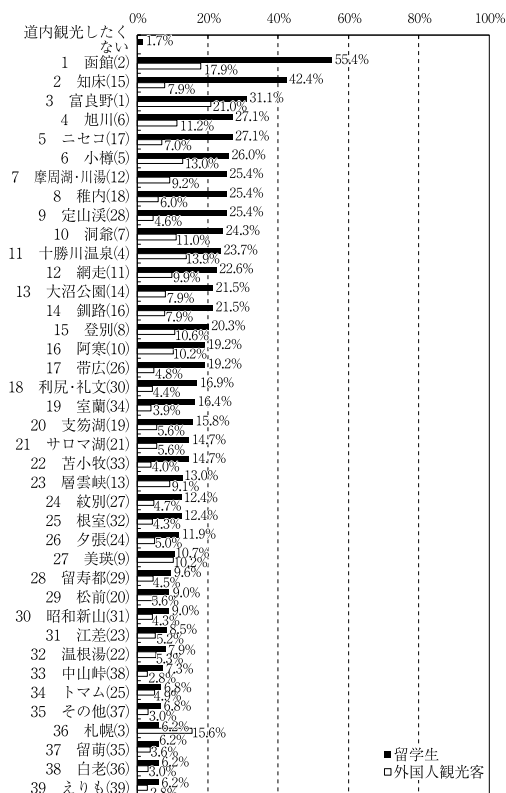


図7 留学生と外国人観光客の道内で訪問したい観光地

出所) 外国人観光客のデータは北海道庁〔4〕による2006年度のデータ。

注) カッコ内の数字は外国人観光客の順位。

果と比べると、今後、留学生が訪問したい観光地の上位中に、札幌から遠距離で日帰りが困難な観光地がより多く含まれる傾向が見られる。一方、外国人観光客の上位5位は、富良野(21.0%)、函館(17.9%)、札幌(15.6%)、十勝川温泉(13.9%)と小樽(13.0%)であり、回答率が20%を上回る観光地は、1箇所(富良野)のみである。同じ観光地について、留学生と外国人の回答割合を比較すると、留学生の方が、外国人観光客よりも高い傾向も見られる。

図8は、留学生と外国人観光客の道内観光で、今後してみたいことを示す。留学生の上位5位は自然観賞(84.2%)、温泉・保養(58.2%)、名物の飲食(45.8%)、都市見物(40.1%)と花の名所めぐり(39.5%)であり、回答率が40%を超える項目は4項目である。過去1年間の観光旅行目的(図3)と同じ項目どうしで比較してみると、「今後してみたい」の方が「過去1年間の観光旅行目的」よりも回答率が高い傾向が見られる。また、今後、農・漁業体験をしてみたいという留学生の回答割合は21.5%であった。外国人観光客の場合

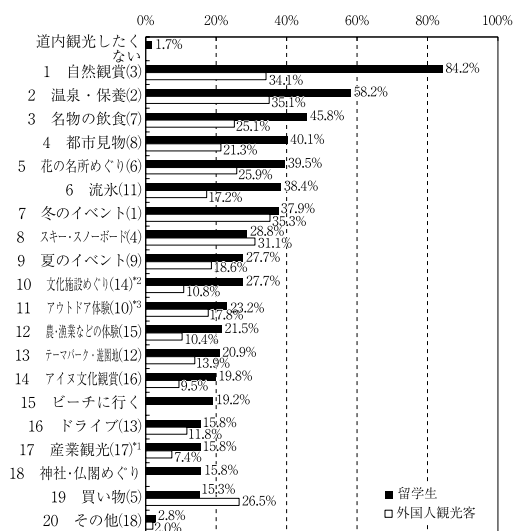


図8 留学生と外国人観光客の道内観光で今後してみたいこと

出所) 外国人観光客のデータは北海道庁〔4〕による2006年度のデータ。

注1) 産業遺産や工場見学などの産業観光。

注2) 美術館などの文化施設めぐり。

注3) 乗馬・ラフティングなどのアウトドア体験。

注4) カッコ内の数字は外国人観光客の順位。

についてみると、上位5位は、冬のイベント(35.3%)、温泉・保養(35.1%)、自然観賞(34.1%)、スキー・スノーボード(31.1%)と買い物(26.5%)であり、回答率が40%を超える項目はない。図3に示した外国人観光客の観光旅行目的と同じ項目どうしで比較してみると、「今後してみたい」の方が回答率が低い傾向が見られる。また、今後、農・漁業体験をしてみたいという外国人観光客の回答割合は10.4%であった。

図7および図8の結果から、今後も道内観光したいという意向は、留学生の方が外国人観光客よりも強いという傾向がみられる。

4. 結 論

本論文では、北海道大学在学中の留学生を対象者としたアンケート調査分析を通じ、留学生の日本国内における観光動向を明らかにした。主な分析結果は、以下の通りである。

①留学生の道内訪問先および道内観光目的は、外国人観光客と似ている傾向が見られた。また、「自然観賞」は観光目的の項目の中でもっとも順位が高かった。

②留学生は、外国人観光客よりも、公共交通の利用が多く、宿泊数が少なく、安価な宿泊施設の利用が多く、旅行会社を利用する割合が低いという傾向が見られた。

③留学生は、外国人観光客よりも、道内観光全体に対する満足度が低いという傾向が見られた。また、今後も道内観光したいという意向は、留学生の方が外国人観光客よりも強いという傾向がみられた。

最後に、今後における研究の発展方向について述べたい。本研究は、留学生の日本国内における観光動向に関する基礎データの収集に焦点が当てられ、分析内容が単純集計レベルに留まっている。そのため、本論文で得られた上記①から③の分析結果と国内外の既存研究における分析結果との比較なども踏まえ、観光政策の立案などでも活用できる本格的な基礎的知見を得るためのより詳細なデータ解析(留学生の属性別分析など)は、稿を改めて試みたい。

(付記) 本論文における草稿内容の一部を日本計画行政学会北海道支部平成20年度研究会(平成20年11月21日(金)、札幌市男女共同参画センター)で報告した際には、討論者の松木靖先生(北海道武蔵女子大学)から貴重なコメントを頂き、草稿内容を改善することができた。また、アンケート調査の実施にあたっては、出村克彦先生はじめ、北海道大学の多くの教職員、留学生の方々にご協力を頂いた。これらの方々に、深く感謝の意を表したい。

註

(註1) JNTO [8] や北海道庁 [4] は、観光を終えて日本から出国する外国人に対し、出国する日本国内の空港などで、アンケート調査を実施している。

(註2) 国内観光の動向を分析したものではないが、留学生を対象とした既存研究として、広島大学の留学生の意識調査に基づき、東広島市の景観評価に影響を及ぼす要因などを分析したものがある(金ほか [9])。

(註3) 北大に在籍している留学生の人数は「平成19年度北海道大学部局別外国人留学生数」に基づいて作成した。北大の留学生は2007年10月時点で、全学部合計で889人である。

(註4) アンケートの配布について、農学部の場合は農学部留学生担当の教員から2007年12月まで農学部内に在籍していた留学生名簿に基づき、本人あてに農学部内の郵便ポストへ直接、所属する研究室に配布した。工学部の場合は工学部の教務係から2007年10月版の留学生名簿に基づき、留学生あてに各研究室の教員を経由して配布した。農学部、工学部を除き、その他の学部の場合は各学部の教務係を通じて、留学生にアンケート票を配布した。アンケートの回収について、学内便経由で(全学部共通)、アンケート実施者の手元に回収した。

(註5) 北大に在籍している留学生の情報は、北海道大学『A brief sketch of Hokkaido University 2007-2008』に基づいて作成した。留学生に関する詳しい情報は、調査当時の最新データである2007年5月時点のものである。

(註6) 日本語の会話レベルについて、A+は「母国語とほぼ同じレベルで会話できる」、Aは「母国語より若干劣る程度で会話できる」、Bは「基本的な意味を伝えることができるが、いくつか間違いがある」、Cは「基本的な意味を伝えることができるが、たくさん間違いがある」、Dは「単語を並べる程度の会話ができる」、Eは「日本語での会話ができない」ことを示す。

- (註7) Hsu and Sung〔6〕やKim and Jogaratnam〔7〕では、米国在住の留学生を対象とした調査において、自然に関する項目は都市見物よりも全般的に順位が低かったことを見いだしているが、本研究による留学生の観光目的の結果は、これらの調査結果とは対照的である。
- (註8) Hsu and Sung〔6〕やKim and Jogaratnam〔7〕では、自動車の利用が最も多く、飛行機がそれに次ぐ一方で、バスや列車の利用は少ないという結果が得られている。

引用文献

- 〔1〕 Chadee, D. D. and J. Cutler., “Insights into International Travel by Students,” *Journal of Travel Research*, 35 (2), 1996, pp.75-80.
- 〔2〕 Collier, A., *Principles of Tourism—A New Zealand Perspective (6th edition)*, Hospitality Press, 2003, pp. 252-256.
- 〔3〕 Field, A., “The College Student Market Segment: A Comparative Study of Travel Behaviors of International and Domestic Students at a Southeastern University,” *Journal of Travel Research*, Vol. 37, No. 4, 1999, pp.375-381.
- 〔4〕 北海道庁『平成18年度訪日外国人来道者動態・満足度調査 調査報告書』, 北海道経済部観光のくにつくり推進局, 2007.
- 〔5〕 北海道庁『北海道外客来訪促進計画 国際観光推進プログラム—ようこそHOKKAIDO—』, 北海道庁, 2005.
- 〔6〕 Hsu, C. H. C. and S. Sung., “Travel Behavior of International Students at a Midwestern University,” *Journal of Travel Research*, Vol.36, No.1, 1997, pp.59-65.
- 〔7〕 Kim, K. and G. Jogaratnam., “Activity Preferences of Asian International Students and American Domestic Students: An Alternate Basis for Segmentation,” *Journal of Vacation Marketing*, 9(3), 2003, pp.260_270.
- 〔8〕 国際観光振興機構 (JNTO)『JNTO訪日外客訪問地調査2005-2006』, (財)国際観光サービスセンター, 2006.
- 〔9〕 金華・村川三郎・西名大作「留学生と日本人住民による東広島のみどり景観評価構造の比較」『日本建築学会計画系論文集』, 第544号, 2001, pp.47-54.
- 〔10〕 Ryan, C., “Chinese Students: Holiday Behaviours in New Zealand,” *Journal of Vacation Marketing*, Vol. 13, No. 2, 2007, pp.91-105.